

讃岐国府跡（第29次調査） 現地説明会資料

2012年1月21日(土)

香川県埋蔵文化財センター

讃岐国府跡探索事業に伴う発掘調査も、3年目となりました。今年度は、「讃岐国司庁址碑」周辺の調査を実施しています。発掘の結果、多くの新たな成果を得ることができました。土地所有者をはじめ地元の方々に、厚く感謝申し上げます。



■ i 国府跡をどのように見つけるのか

8世紀から13世紀まで存在したと思われる讃岐国府。しかし、そのすべてが発掘で見つかるとは限りません。

今回の調査で地層を観察すると、14~15世紀に国府の跡地を水田として再開発していたことがわかりました。この時、国府時代に地面に刻まれたさまざまな痕跡（遺構）が大きく削られ、ならされていたのです。かろうじて見つかった遺構も、残り具合の悪い状態にあります。

わずかに残った遺構と、その周辺から見つかった瓦や土器などの遺物。これらをパズルのようにつなぎ、組み合わせることで、本来あった姿をどこまで復元できるか。これが、讃岐国府跡の発掘調査の課題なのです。

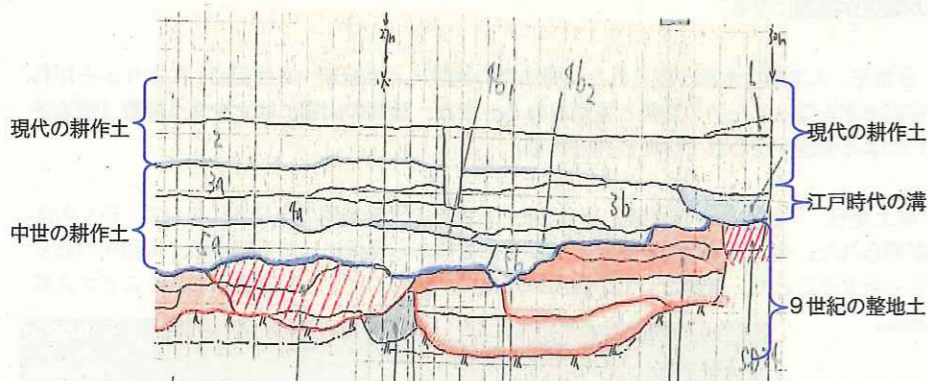


図1 29-1トレンチの地層（縦横の比率を変えています）
9世紀の整地土が中世の層に大きく削りこまれていることがわかります

■ ii 古代の掘立柱建物

29-3トレンチで掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が見つかりました。掘立柱建物とは、穴を掘って柱を立てる建物形式で、柱をすえるための穴（柱穴）が規則的に並んで見つけられます。一辺0.4~1.0mの四角い形状は、古代の柱穴であることを示しています。

見つかった建物の中には、坂出平野に見られる条里型地割に近い向きのもので、正方位（正確に東西南北を向く）のものがあります。

遺物がまだ出ていないことから、その建てられた年代を考えることが今後の調査の課題と

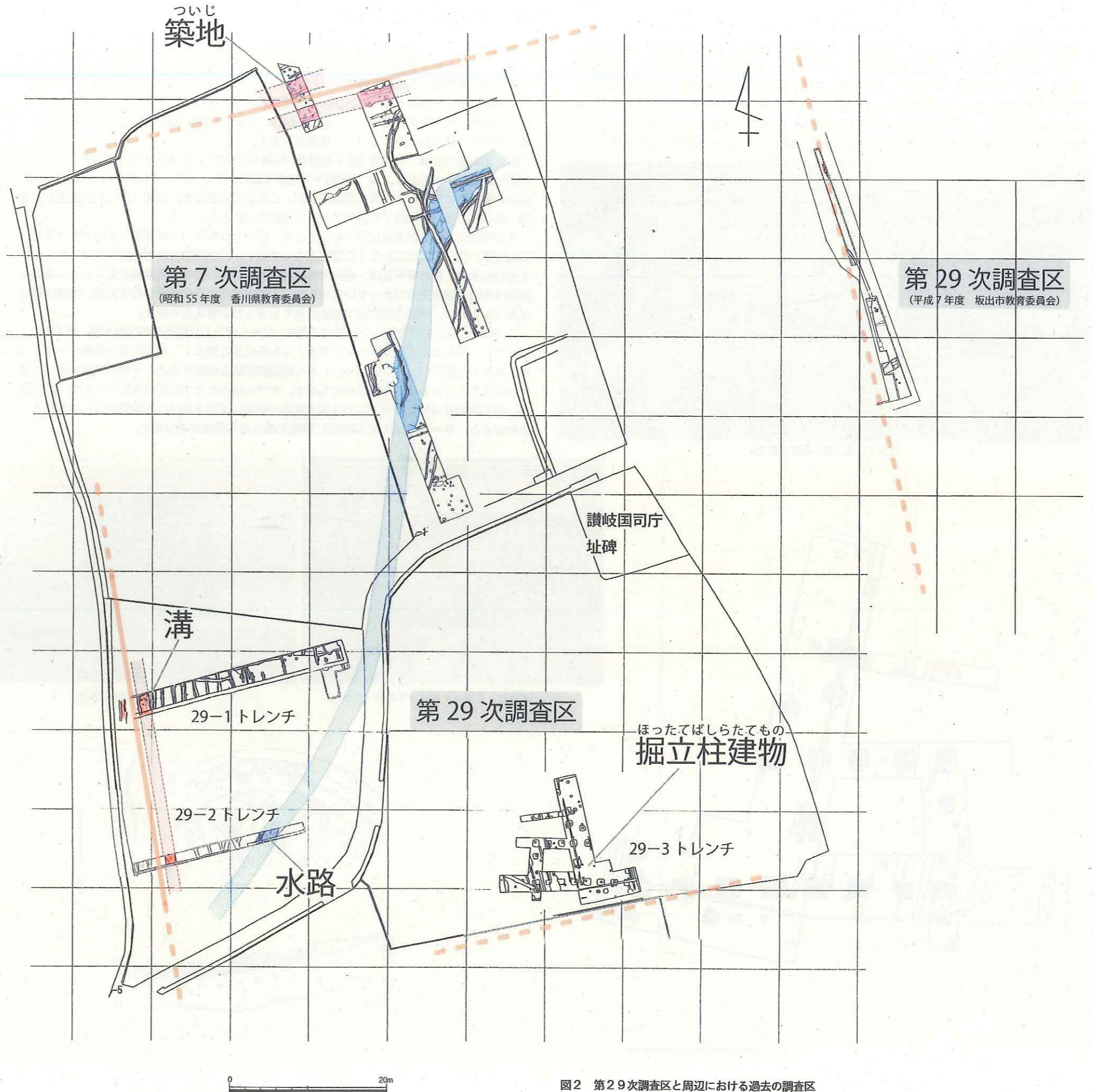


図2 第29次調査区と周辺における過去の調査区

なります。しかし、これまでの国府跡での調査と、県内での古代寺院や集落での調査成果を参考にすると、条里型地割に近い向きの建物は8世紀以後と見られ、平安時代の役所の一部である可能性があります。また正方位のものは、それよりも古い7世紀の可能性があります。

特に正方位の建物は、平面の形が細長く(3×7間)、床面積が60㎡にも及び、古代の建物としては大きい部類になります。他の建物との関係や細かな建築年代は今後の課題ですが、国府以外の施設、たとえば阿野評衙(阿野郡衙の前身施設)や豪族居館などの可能性とともに、成立期の国府(初期国府)の可能性もあります。従来の発掘成果の読み直しや、県内のほかの遺跡での状況との比較により、建物の評価を深めていくことが課題となります。



写真1 正方位の掘立柱建物

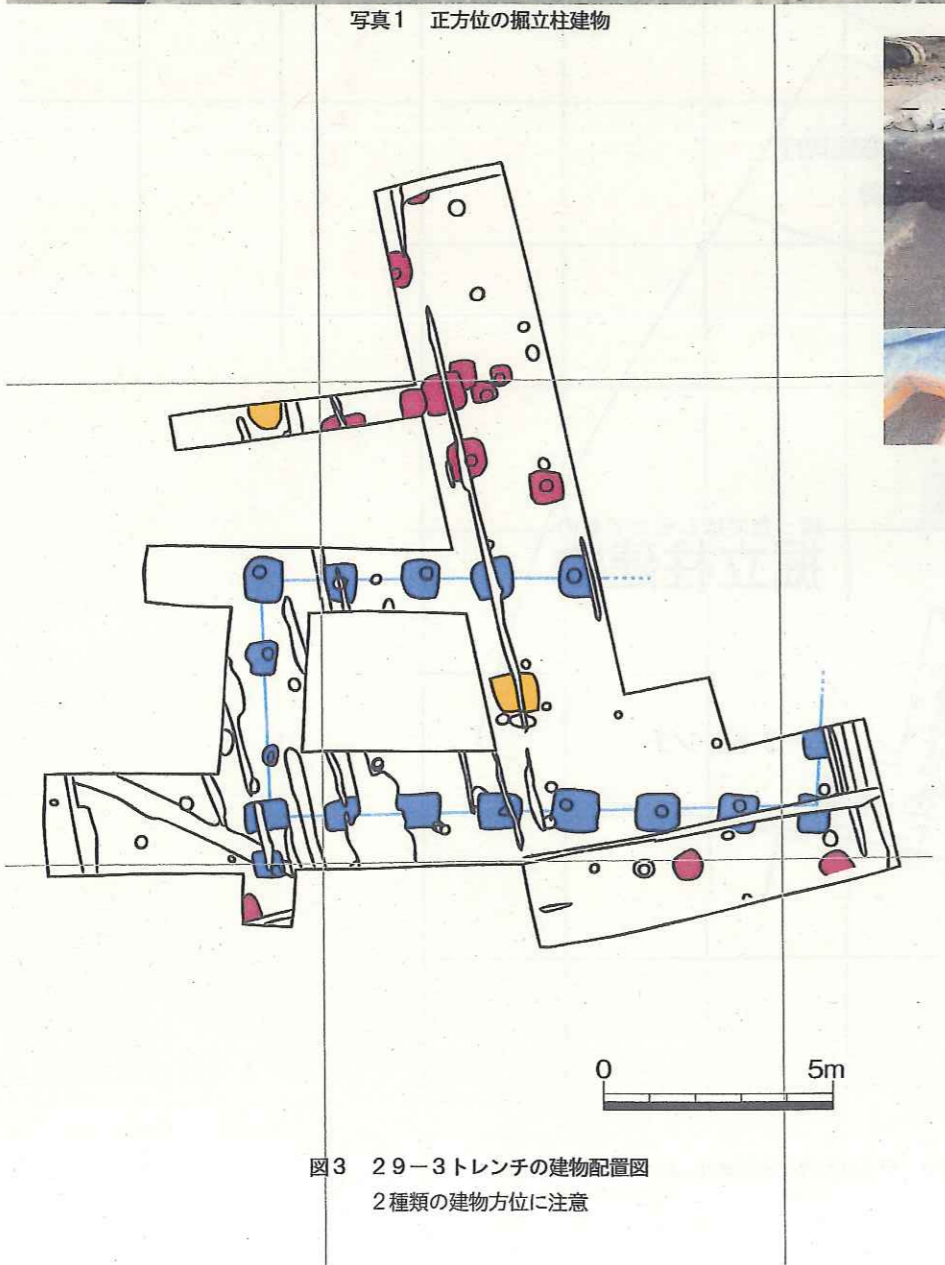


図3 29-3トレンチの建物配置図
2種類の建物方位に注意

■ iii 平安時代前期の役所跡?

29-1・2トレンチでは、南北方向に延びる溝が見つかりました。この溝の位置は、境で平野に残る条里型地割の南北基準線(1町=109mごとに基盤の目のように見られる)から1/2町の位置にあることから、計画的に設置されたことがわかります。また、溝の西側には砂や粘土質の土を薄く交互に盛り、固くしめたような人工的な地層(整地層)が見られます。溝に何らかの構造物が伴っていたと推測されます。

国司庁址碑の北側での発掘(第7次調査、昭和55年度)では条里の東西基準線上に作られた築地が見つかり、10世紀前半に埋まり始めたという点で年代的に共通しています。全容を明らかにするのは今後の課題ですが、これまでの調査で、西側(第29次調査)と北側(第7次調査)を区画する施設があった可能性が出てきました。

今回の調査では瓦が大量に見つかり、軒瓦には独特の文様をもつものがあります。軒丸瓦は、国分寺瓦の流れをくむ意匠をもっており、8世紀末~9世紀前半に作られたものと思われる。また軒平瓦は、県内では類例に乏しいものです。瓦屋根を支えた柱の基礎=礎石は今回の調査で見つかりませんが、iで述べたような状況からすれば、本来は礎石があったものの、中世の耕作化で撤去されてしまったと考えられます。

このほか、役人の帯を飾った石製品(巡方:じゅんぼう)や儀礼用の白色土器、埴(せん、古代のレンガ)などが見つかりました。これらは瓦と同じく、中世の層から見つかり、本来の位置を保っていません。しかし周辺調査区と比較すると、今回の調査区周辺に役所の存在をうかがわせる遺物が目立ちます。すでに述べたような区画施設の有無や、東約50mの第2次調査(昭和52年度)で9世紀前半~中頃に斜面を埋めた整地層が見られることとあわせると、9~10世紀にこの付近に役所があった可能性があります。



写真2 29-1トレンチの溝(北から)

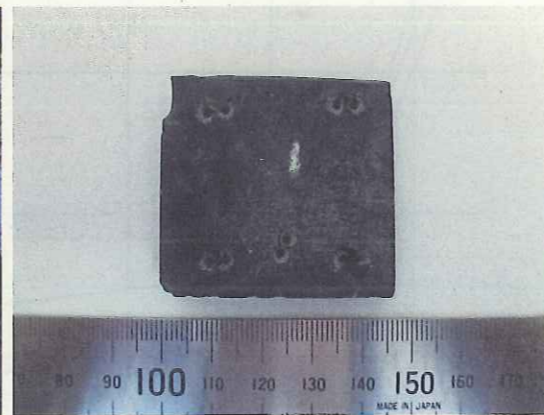


写真3 石製巡方(裏面)

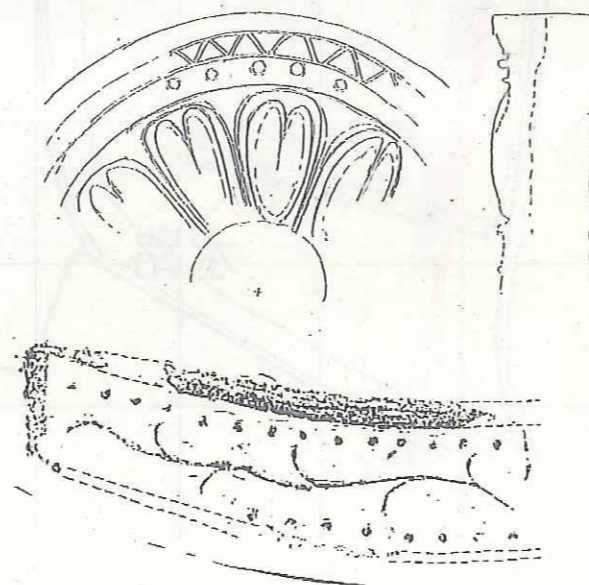


図4 見つかった軒瓦(上:軒丸瓦、下:軒平瓦、縮尺不同)

■ iv 奈良時代の水路と生産施設

29-1トレンチの9世紀と推測される地層の下から、内部で火を燃やした施設(焼土坑)が見つかりました。周辺からは金属加工の道具(フイゴ羽口)や金属滓(溶けて不純物と混ざったもの)が出土していることから、それとの関連が課題になります。

また29-1・2トレンチでは、8世紀の大型の水路も見つかりました。第7次調査で見つかった大溝に続く可能性があり、開法寺池がある谷筋の水を落とすための人工的な水路と考えられます。



写真4 8世紀の大溝(右は護岸用の木材)

■ v わかったことと、今後の課題

① 讃岐国府跡の発掘で見つかった古代の建物としては、第6次調査(昭和54年)の総柱建物(倉か)以来の発見になり、2種類の方位が時期差を表すと考えられること。

② 具体的な範囲については今後の課題を残すが、9~10世紀に西側と北側を囲む役所が存在していた可能性が指摘できるようになったこと。中世に削り取られて遺構としての痕跡は残っていないが、独特の意匠の瓦を葺いた建物があったと考えられる。886~890年(仁和2~寛平2)に讃岐国府に赴任した菅原道真が詠んだ漢詩「客舎冬夜」に、「開法寺は府衙の西に在り(開法寺は役所の西にある)」と記されており、今回の調査箇所と道真の言う「府衙」との関係が課題になる。

③ 8世紀、人工的な水路が掘られた。開法寺の建設(7世紀末~8世紀初)によりふさがれた谷筋の水を落とすための施設と推測される。また、鼓岡の山裾には火を使う施設(鍛冶炉か)による生産が行われていたと見られる。

④ 以上から、7世紀から10世紀、また14~15世紀の土地利用のあり方について、多くの知見が得られた。今次以前の調査成果とあわせ、古代から現代にいたる府中の土地利用のあり方を分析することで、遺跡としての国府の変化について、イメージを作っていくことが大事である。



写真5
府中本村地区の
現在の空中写真